

パーキンソン病の話

「すくみ症状」

いろいろな「すくみ」

パーキンソン病が進行すると、歩き始めに足がすくんで前に出ない現象が見られることがあります。また、方向転換時にもしばしば見られます。足が地面に張り付いたような状態だといえます。歩こうと焦るほど足は出ずに、転倒につながることもあります。

この症状は一般に「すくみ足」と呼ばれます。すくみ現象は足だけではなく、字を書くときに字が書き始めより小さくなる現象（小字症）や、話し言葉の音が話し始めより少しずつ小声になる現象（小音症）も含みます。どれも日常生活に支障が生じます。

パーキンソン病では初期症状ではない

症状がすくみ足から始まった場合には、通常はパーキンソン病ではないと考えて良いでしょう。脳の血管障害の可能性が高くなりまのでMRI、CT検査は必須となります。

すくみ足の原因

すくみ足が起きる理由は、運動のリズム形成が障害されるためだと考えられています。メカニズムは不明ともいえます。無動症や筋肉縮小に関連があると考えられています。

メトロノームのように規則正しく歩きます。

く繰り返す音に合わせて歩くと、すくみ足はなくスムーズな歩行ができます。これは外からのリズム刺激の結果です。

すくみ足は転倒の原因

すくみ足の多くは、薬の効果が低下している時によく見られます。ドパミンに関連しているオフ期（効果が消失している時期をいいます）のすくみ足は薬剤で対応できる場合もあります。まれに薬が効きすぎている場合にも見られますが、この場合にはドパの減量を行います。

すくみ足は図のように転倒の原因になります。転倒は骨折を起こ

す危険が高く、その結果、さまざまな問題を生じていくため、すくみ足対策は重要です。対策に関しては次回に説明します。

【図】パーキンソン病の歩行・バランス障害と転倒<悪循環>

※順天堂静岡病院 大熊教授による

